

言語を失う民族のアイデンティティ
-グアテマラのシンカの人々の場合-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2019-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 敦賀, 公子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/19863

言語を失う民族のアイデンティティ

— グアテマラのシンカの人々の場合 —

敦賀公子

はじめに

今日、世界のいたるところで少数言語の話者数の減少が加速化している。言語学者らは、いくつかの大言語が何千もの少数言語を圧迫し消滅へ向かわせる状況は、地球規模の環境破壊と同様、人類にとっての危機だと警鐘している。言語は話者のアイデンティティの核を成すものであるが、近年、民族は生きていながらも固有の言語が失われる現象が多くみられる。先スペイン時代より多言語社会である中米においても、先住民言語話者数の減少さらには言語そのものの消滅が深刻な状況となっている。

本稿は中米のグアテマラ共和国の先住民で、人口は有しながらも言語は消滅の危機にあるあるシンカ (xinka) の人々を取り上げ、民族固有の言語の消失とアイデンティティの問題について社会言語学的観点から考察するものである。

シンカの人々の存在がグアテマラ国内で知られるようになったのは、長きにわたる内戦終結・和平合意締結 (1996年) に先立ち調印された「先住民のアイデンティティと権利に関する合意」に「マヤ (maya)、ガリフナ (garifuna)、シンカがグアテマラの先住民である」と明記されてからだと言える。マヤとガリフナについては同合意以前から広く認知されていたが、シンカについては人類学者の間でさえもほとんど知られておらず、言語学研

究でも 20 世紀前半に既に消滅した言語として位置づけられていた。しかし、和平合意から数年を経て、彼ら自ら市民団体を結成し、土地所有問題をはじめ、政治社会的活動を通して存在を示しはじめている。2002 年の国勢調査結果をみると、帰属民族を「シンカ」と答えた人は、16,000 人を超え、第一言語（発話習得言語）をシンカ語であると答えた人が 1,283 人であった。

これらの数字からシンカの現実を読み取ることができるのではないだろうか。「先住民族合意」によって、長期にわたる抑圧の歴史の過程で話者人口は減少したものの、シンカに帰属すると自認している人々が登場し、自らの民族的アイデンティティの再興を始めたことを物語っているのではないだろうか。本稿では、この国勢調査結果にいたる経緯と要因を解明するために、内戦時代から和平合意までの経緯と先住民社会への影響を述べ、次に国勢調査結果からの言語関連項目の分析を試みる。さらに、シンカの人々がかかえる諸問題とその要因および和平合意を契機にその解決に挑むシンカ団体の具体的な活動を提示し考察する。

1. 内戦時代以降「先住民族のアイデンティティと権利に関する合意」までのグアテマラ先住民社会の状況 (1963 年-1996 年)

グアテマラの内戦は米・ソ・キューバ間の冷戦の影響を受け、1963 年から軍部対マルクス主義ゲリラ間の権力闘争として始まった。当初は先住民層の直接参加や彼らが攻撃的になることはなく、大農園主・政府軍・伝統政党の連合対左翼ゲリラが主たる対立軸であり、東部が主たる戦場であった¹⁾。この東部地域は古来シンカの人々の居住地域でもある。

その後 1970 年代に入ると、近隣のニカラグアやエルサルバドルでも内戦が始まり、1990 年代半ばまで中米紛争の時代となる。この時代以降グアテマラでは、内戦の舞台は西部マヤ高地へ移った。1978 年から 1983 年にかけて左翼ゲリラの統制を離れたマヤの人々主導の開放運動が始まり、軍事政権



桜井(小林) 2006 p.22 をもとに筆者作成

地図1 グアテマラの行政区分

が彼らの集団殺害を実行した²⁾。その後事態はさらに悪化し、軍事政権の統制と指揮によるマヤ民族同士の虐殺も起こるようになった。特に残虐だったのは1982年に政権を握ったリオス・モント将軍によるゲリラ掃討作戦で、これにより440もの村が消滅し、7万人以上が殺害され、100万人を超える国内避難民、30万人に達する国外避難民が生まれた³⁾。

1980年代に入ると、国連諸機関やラ米域内の国々およびスペインをはじめとする第三国が仲介に入り和平交渉への模索が本格的に始まり、軍の標的となっていたマヤの人々の人権侵害を訴えが海外へ向けて発信された。そうした中1985年に制定された憲法には「個人と共同体は各自の言語と慣習を保持する権利がある(58条)」、とうたわれ、「先住民語がグアテマラ国家の文化遺産の一部である(143条)」ことが強調された⁴⁾。

言語関係では、二言語・通文化教育計画推進のため、マヤ諸語表記を規範化する機関として、1986年にマヤ言語アカデミーが結成され、マヤ文化の再活性化運動、いわゆる汎マヤ運動を主導した。1990年にはマヤ教育文化

センターなどの組織が結集し、グアテマラ・マヤ組織協議会が設立された⁵⁾。

さらにコロンブスの新大陸到達から500年を数えた1992年、マヤ女性のリゴベルタ・メンチュウのノーベル平和賞受賞は、グアテマラの和平合意への進展を世界に確約するものであった。その後和平交渉へ直接参加できない汎マヤ運動組織をはじめとする先住民組織は先住民のアイデンティティと権利に関する独自案を提起すべく、先住民の諸権利を定めた国際労働機関(ILO)169号条約⁶⁾に沿った合意案が作成され、1995年に政府と反政府ゲリラ(URUNG)の間で調印された「先住民のアイデンティティと権利に関する合意」(以下「先住民合意」)が調印された。同合意に「マヤ、ガリフナ、シンカがグアテマラの先住民である」と明記された。

内戦時代を通じて、マヤの人々が政治的に声を上げ、軍の標的となり、大きな国際世論を呼んだ一方で、ガリフナとシンカは影を潜めてきたが、この合意に民族名があげられたことで、その存在が世に知られることとなった。このILO169条約が契機となり、世界各国で植民地主義と同化政策は否定されるようになった。中米各国においては、内戦からの復興と民主主義国家再建の重要な指針となった。

2. グアテマラの先住民と言語 — 国勢調査結果より

グアテマラ国立統計局による国勢調査は、今まで1981年、1994年、2002年の3回実施されており、次回は本年(2018年)7月から8月にかけて行われ、結果は2019年に発表される予定である。

和平合意締結前の1981年及び1994年の調査における民族・言語については、“indígena”(先住民)と“no indígena”(非先住民)の2分類のみであったが、2002年の調査では、グアテマラ史上初めて、マヤ系21民族グループ⁷⁾、ガリフナ、シンカ、ラディーノ⁸⁾、その他、という詳細な分類で行われた。これは1995年の「先住民合意」に記された「多民族・多文化・多

言語社会としての国家建設」という基本理念を受けたもので、各回答者の「自己定義」を尊重してアンケートが行われた。

次に2002年国勢調査結果(表1, 2)をもとに、先住民言語の状況について述べることにしたい。

表1 帰属民族グループ⁹⁾

(単位:人)

	全 国	都 市 部	地 方
総人口	11,237,198	5,184,835	6,052,361
マヤ系	4,411,964	1,396,490	3,015,474
シンカ	16,214	3,180	13,034
ガリフナ	5,840	4,381	658
ラディーノ	6,750,170	3,759,737	2,990,438
その他	53,608	21,047	32,761

出典:2002年グアテマラ国勢調査(グアテマラ国立統計院:pp.33-34)

注) 所属民族グループ名の「マヤ系」は調査ではマヤ諸語21言語と同じ名称に分類されていたが、ここでは総称して「マヤ系」と記す。

表2 第一言語(発話習得言語)¹⁰⁾とそれ以外に使用する言語¹¹⁾

(単位:人 *3歳以上を対象とする)

	3歳以上 人 口	第一言語				
		マヤ諸語	シンカ語	ガリフナ語	スペイン語	その他
総 数	10,283,387	3,174,383	1,283	3,564	7,080,909	23,248
バイリンガル	2,181,021	1,790,524	495	2,686	374,308	13,008
《第一言語以外》 マヤ諸語	259,331	55,660	176	87	202,790	618
シンカ語	2,121	675	—	8	1,429	8
ガリフナ語	2,302	983	9	—	1,295	15
スペイン語	1,744,555	1,729,587	279	2,457	—	12,342
その他	172,602	3,618	31	134	168,794	25
モノリンガル	8,102,366	1,383,859	788	878	6,706,601	10,240

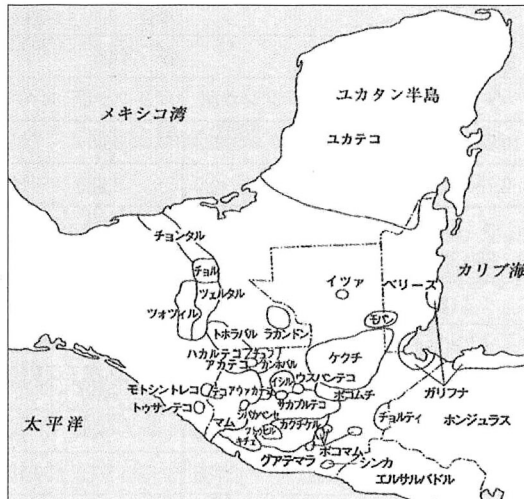
出典:2002年グアテマラ国勢調査(グアテマラ国立統計院:p.35)

注) 「マヤ諸語」は調査ではマヤ系21言語が列記されたが、ここでは総称し「マヤ諸語」と記す。

1) マヤ系民族 — 話者人口を堅持

マヤ系民族は、グアテマラの総人口の約 40 パーセント、先住民人口の 99 パーセント以上を占めている (表 1)。同国東部と大西洋岸地域を除いてほぼ全土に分布し、グアテマラ国内では 21 のマヤ系言語が確認されている他、メキシコのユカタン半島からチアパス州にかけての地域とホンジュラスにも居住している。マヤ諸語の中でもイツァ語は消滅の危機に瀕しているが、その他の言語は数千から数十万の言語人口を有し将来的にも話者人口の維持が見込まれるとされるが、都市部におけるマヤ人のスペイン語使用は増加している¹²⁾。

マヤの人々は独自の言語に加え、1970 年代以降の考古学調査により古代マヤ文明が解明されると、自分たちの祖先の偉業に誇りをもつようになった。それゆえ、文化を保護する運動が比較的容易に進められ、先述の厳しい内戦時代も色鮮やかな民族服と言語は維持されてきた。近年は多くはないものの



桜井 (八杉) 2006 年 p. 180

地図 2 言語分布図

国会議員や地方議員など、政治的要職などにも進出し、内戦後の先住民社会の復興を主導する役割を果たしている。

2) ガリフナ — ユネスコの無形遺産に登録

表1のとおり、ガリフナは先住民人口のわずか0.36パーセントを占める。表2のとおり、ガリフナ語話者の約75パーセントがスペイン語とのバイリンガルだと言えるが、モノリンガルも878人存在している。

ガリフナはカリブ海の先住民とアフリカの黒人の混血で18世紀末に中央アメリカの大西洋岸に移り住んだ民族である。メソアメリカ文化圏とは明らかに異なる文化を有し、黒人的形質特徴をもつ一方、言語や伝統的生業の形態などはカリブ海の先住民との関係が大きい¹³⁾。2001年、ユネスコの無形遺産に彼らの言語、舞踏および音楽が登録されたこともあり、少数民族ではあるが、その存在はグアテマラ社会でも認知されている。

ホンジュラスに多くのガリフナが居住する他、100年程前から米国資本の多国籍企業によるバナナ・プランテーションでの労働を通じて、米国への移住が起り、現在同国全土に約10万人、そのほぼ半数がニューヨークに居住しているという¹⁴⁾。

3) シンカ — 消滅の危機言語の民族

シンカは、表1の帰属民族とおり、先住民人口の0.13%と、極端に少ない人口を示している¹⁵⁾。現在グアテマラ東部のサンタ・ロサ県、フチアパ県、ハラパ県に居住している。同地域は豊かな農牧地帯が広がるが、その多くは大農園主の所有のため、後述のとおりシンカの人々は土地なし農民としての厳しい生活を強いられている。

シンカ語はメソアメリカ圏の言語とは類縁関係はなく、南米のチブチャ語と遠い類縁関係が認められる独立した言語だと考えられている¹⁶⁾。1960年代に生きたシンカ語の唯一の言語学研究を行ったシューマン博士の研究によ

ると、当時言語運用出来る話者は、サンタ・ロサ県では約300名を数えるのみであろうと推定している。また、若者は既にほとんどシンカ語を話さず、高齢化が進行していたとのことである¹⁷⁾。1990年代の言語学研究では、シンカ語は、既に消滅した言語と認識されていた¹⁸⁾。

しかしながら、2002年の国勢調査結果(表1)によれば、シンカを帰属民族と答えた人は全国で16,214人、第一言語がシンカ語であると答えた人が1,283人となっている。さらにその内788名がモノリンガルであった。既に消滅したと考えられていたシンカ語の話者が想像を超える数字で存在したこと、そして言語運用能力はないものの、シンカに帰属意識を持っている人がその10倍を超える数であったことは、人類学者や言語学者の間で大きな驚きであった¹⁹⁾。

グアテマラ史上初の民族名を明記しての国勢調査であったこともあり、調査方法に少なからず不備はあった可能性も否めない。また、バイリンガルかモノリンガルかを判断する言語学的基準は設けられておらず、回答者の自己定義で答えられた。しかしながら、これらの数字からシンカの現実を読み取ることができるのではないだろうか。

3. シンカの歴史概要 — 現代の土地所有問題を中心に

1) 先住民の土地所有問題

先述のILO 169条約にも記された通り、多くの先住民民族にとって土地問題が一番の懸案事項である。地下資源がほとんどないグアテマラにおいては、植民地時代以来、土地と労働力(先住民)が富の基盤であると同時にあらゆる問題の根源的要因でもある。和平合意後、各地で次々に明るみにされる土地問題を武力ではなく話し合いで解決するために「大統領府土地に関する法的支援と紛争解決局」(CONTIERRA)²⁰⁾が設立された。シンカの集落でも1999年になって土地をめぐる武力抗争が再燃したが、CONTIERRAの仲

裁を得て非暴力で共有地を奪回しようと、現在訴訟中の土地紛争も少なからずある。

先住民らが古来の土地所有権を証明するには、土地証書に相当する文字記録が必要であるが、シンカのみならず多くの少数民族グループの場合、文字記録が極端に少なく、また、存在していても現代の法的根拠に基づいていないとされる事例が少なくない。植民地時代の史料のほとんどは統治者であるスペイン人によって記録されたものであるが、シンカが古来居住するグアテマラ東部は、植民地時代の史料に先住民の個別民族グループ名が現れることがほとんどなく、総じて“indio”（先住民）と記されている。わずかな足跡としては、1768年から1770年にかけて同地域の教会を巡察したコルテス・イ・ララスが、現在のサンタ・ロサ県のグアサカパンとタシスコの2村の記録の中で「xinca」という名称をあげている²¹⁾。

和平合意後、マヤ記録調査センター（CEDIM）²²⁾ および人類学や社会学などの研究者達が先住民の記憶の口承記録を収集して歴史の復元に努めている。

2) 口承記録からの現代史 — 土地問題との闘い

サンタ・ロサ県、フチアパ県においてシンカの人々の土地問題に関わる証言を集めた社会人類学者レトニア・スレタらの報告（2003年）から、現代史を紐解き、2002年国勢調査に現れた彼らのアイデンティティ再構築への動きの要因を考察したい。

シンカの居住する東部においても他の先住民居住地域と同様、彼らに対する抑圧は長年存在した。特にホルヘ・ウビコ将軍の独裁政権期（1931-1944年）は厳しい弾圧があったという。その時代、役人達はシンカらの土地台帳（登記簿）を信用せず、祖先の代から共同体で管理運営してきた共有地は不当に没収・売却され、彼らは安い労働力として搾取されることになった。また、それに従わなければ強制連行されるか軍に入隊させられるという仕打ちを受けたという²³⁾。中でも最も悲惨な事例は、1970年代に入り、農牧省の

農業試験場に彼らの共有地が渡ってしまった事例である²⁴⁾。

一方、先住民文化の否定はルフィノ・バリオス大統領時代 (1873-1885 年) に既に始まっていたが、ウビコ独裁時代になると厳しさが増し、民族服の着用や先住民語の使用、そして伝統儀式などが全面的に禁止された²⁵⁾。ウビコ政権が倒れた後の 10 年間は、「つかの間の春」と形容される通り、ようやく民主政治となった。ホセ・アレバロ政権時代 (1945-51) にはシンカの地域も状況は多少改善された。それに続くアルベンス政権 (1951-54) では農地改革法が実施されたものの、その後間もなく内戦時代に向かったため、彼らのような小作農民にはとっては、さほど恩恵がないまま再び厳しい抑圧の時代に入っていったという。

先述のとおり 1960 年代からシンカが居住する東部地域が、軍部対左翼ゲリラの初期紛争地域となった。その後 1970 年代に入ると、紛争の中心は西部マヤ高地に移るが、東部はエルサルバドルとの国境へ続く地の利であるため、軍や警察の監視が厳しかった。

筆者が 2007 年、2008 年にサンタ・ロサ県の「グアテマラ・シンカ議会」(後述) という団体を訪問した際にも、ウビコ政権期に土地は奪われ、さらに民族服、言語などの使用が禁止されたという話を聞いた。その状況はアレバロ・アルベンス期においても実質的な改善にはいたらず政治的混乱と内戦に巻き込まれていったという。しかし、ウビコ時代以前は女性は手織の民族服を身に着け、シンカ語話者も多く存在したとのことであった。実際グアテマラ東部のシンカの集落を訪問すると、色鮮やかな民族服や独自の言語をもつマヤ地域とは対照的で、一見、先住民ではないラディーノの社会のように見うけられる。人類学者の C. ダリィは、このような顕著な文化的象徴を持たないことがシンカの人々のジレンマでもあると述べている²⁶⁾。

話者人口が既に大きく減少したシンカであるが、1995 年の「先住民族合意」において独自の言語や文化という文化的象徴を失って「外見的ラディーノ化」したのは、彼らの意思ではなく共有地の没収や軍への強制入隊など、

権力者の暴力によるものであると認められ、マヤと同様に、本来の形で存続出来る空間と社会的理解が必要だということが確認されたからである²⁷⁾。それゆえ、表2「第一言語（発話習得言語）」では、シンカ語が1,283名であるのに対し、表1の所属民族グループのシンカ人口がその10倍以上の16,214人を数えていることが納得出来る。レトニア・スレタによれば「ラディーノか先住民か」という2項で所属民族グループを自己定義するならば、この地域におけるシンカ人口は70,000人を数えるだろうと推計している²⁸⁾。

文字記録による歴史を持たないシンカの人々も、ようやく口承記録によって先住民として様々な権利を要求する活動を始めている²⁹⁾。2000年に入り、東部地域には10を超えるシンカの市民団体が出来たという。固有の言語は消滅の危機にあると思われるが、軍事政権時代に没収された共有地を取り返す活動は、かつての共有地運営から引き継がれる社会組織力という一つの伝統文化なのかもしれない。

4. シンカの闘い ― 大規模鉱山開発との闘い

最後に和平合意後に発足したシンカの団体の一つである「グアテマラ・シンカ議会」と近年の活動について述べることにしたい。

1) グアテマラ・シンカ議会

(Parlamento del Pueblo Xinca de Guatemala, PAXIGUA)³⁰⁾

シンカ議会は2001年に設立された。本部はサンタ・ロサ県の県庁所在地クイラパ市にあり、フチアパ県、ハラバ県、チキムラ県を活動地としている。設立の目的は、差別や不公平に対して対話と法的手段によって権利を確保し、政治・経済・社会・文化的発展をめざすことであり、それによって、和平合意に基づいた平和的民主主義国家の形成に貢献すること、としている。参加資格は自らシンカにアイデンティティを感じるものであれば、本人もしくは

家族のシンカ語の運用能力は全く問わず、誰でも入会することが出来るとのことである。

彼らの最大の懸案は土地獲得である。メンバーはいずれも土地なし農民で、普段は大農園で小作人として働いている。ここ数年、共同で賃料を支払って大地主から土地を借用の上、農業を営んでいるが、借地ではなく、彼ら自身の土地を持つことが最大の目標だという。土地奪回を求めてマヤの人々と首都に向かってデモ行進を行った（プレンサ・リブレ紙 2012年4月10日）他、文化的アイデンティティを再構築すべく、シンカの祭りを開催したり、口承文学やシンカ語語彙集などをまとめている。近年は Facebook を通じてより多様な活動を配信している。

2) 鉱山開発と戦うシンカの人々

和平合意が進むと、グアテマラ、エルサルバドル、ホンジュラスの3国は2000年にメキシコと自由貿易協定を締結し2001年1月に発効した。その後、2004年には中米・ドミニカ共和国＝米国自由貿易協定（DR＝CAFTA）が合意に達し、グアテマラは2005年3月に批准され、議会の批准が得られなかったコスタリカを除いて、2006年に発効された。いよいよ中米もグローバル経済に大きく組み込まれることになった。

資源ナショナリズムが全世界的に高まっているが、中米においてはDR＝CAFTA 発効を経て、関税撤廃と同時に海外からの投資の自由化が加速され、特に北米からの投資が増大している。グアテマラではカナダのタホ・リソース（米国ネバダ州本社）が2011年にグアテマラ東部サンタ・ロサ県のサン・ラファエル・エスコバル銀鉱山の開発権を買収し、2013年から25年間の採掘許可を取得した。同鉱山は世界の銀鉱山としては、現在第三位の埋蔵量を誇るとみられている。

本プロジェクトに関して、2012年に同地域で住民アンケートをとったところ、ほぼ全住民が反対していた。グアテマラ・シンカ議会は土壌汚染をは

じめとする環境破壊による彼らの居住地域への被害は甚大だとして、憲法裁判所へ同鉱山開発の中止を訴えた。それに対し、本年2018年3月に同裁判所はシンカ民族についての人類学的調査を国立サン・カルロス大学、デル・バジェ大学、考古学・人類学研究所、文化・スポーツ省に依頼した。これは、シンカの人々が同鉱山のある地域において、ILO 169条約に該当する権利を有する民族であるかどうかを検証するためである。

その後、同年4月に3つの関係機関よりシンカはその土地の先住民であるとの調査結果が出された。一方、裁判のため一時的に操業を停止していることから、タホ・リソーシスは5月に250名の従業員を解雇し、それらの従業員らもまた会社を訴えている³¹⁾。今後しばらく裁判の状況から目が離せない。

隣国エルサルバドルでも、同国北部の米国資本による鉱山開発のボイコットがあった。グアテマラのケースと同じく、鉱山開発による地下水源の汚染と農地の荒廃が進んだため会社側を訴えた。中道左派のフネス政権は、住民らの健康と環境保全を優先とし鉱山開発の差し止めを決定し、2018年4月に鉱山開発禁止法を打ち出した。これは世界で初めて金属鉱物の探査や採掘、抽出、加工などを全面禁止する法律である³²⁾。この環境保護に向けた画期的



出所：No a la Mina（ラテンアメリカ鉱山反対協会）

グアテマラ・憲法裁判所前に集まるシンカの人

な動きは、国境を挟むシンカの人々へも大きく影響を与えたのかもしれない。

おわりに

農業を生業とする先住民にとっての最大の関心事は、自分達の土地を所有することであり、シンカの人々にとっても長年の悲願である。資源のほとんどない中米の小国グアテマラにおいては、古来より、土地問題は政治・社会の複雑かつ根源的問題であるが、グローバル経済の波がシンカの人々の住む地域に世界有数の銀鉱山開発とそれによる環境破壊をもたらしている。内戦中は影を潜めていたシンカの人々も、和平合意を経て、ようやくその悲願を達成すべく、土地奪回に向けて動き出した矢先である。

言語は消滅の危機に瀕し、民族服も身に着けなくなり「外見的ラディーン化」したシンカの人々であるが、それは彼らの意思ではなく権力者の暴力によるものであった。現在それは、彼らにとっての大きなジレンマであるが、かつて祖先が共有地を管理運営していたように、社会組織力を発揮して土地問題や鉱山開発問題に挑み、その過程で新たなアイデンティティが形成されつつあるようにも思われる。

グアテマラでは2002年の国勢調査以来の調査が2018年7月から8月にかけて行われる。調査主体の国立統計局のホームページを見ると、先住民への差別対策大統領府委員会 (Comisión Presidencial contra la Discriminación y el Racismo contra los Pueblos Indígenas en Guatemala, CODISRA) のメッセージが目に入ってくる。グアテマラの先住民は、マヤ、ガリフナ、シンカであると明示するとともに、調査においては自己決定が尊重されることを強調している。上述の鉱山開発の裁判のためか、マヤやガリフナよりもシンカについてのページが多きかかれている。次の国勢調査でシンカに関する数字がどのように出るか、注視していきたいと考える。

〔注〕

- 1) 狐崎 2006, pp. 135-136.
- 2) Ibid, pp. 135-136.
- 3) 小林 2006, pp. 170-171.
- 4) 桜井 2011, p. 19.
- 5) 小林 op. cit, pp. 172-173.
- 6) 正式名「独立国における原住民および種族民に関する条約」。1989年採択 1991年発効。グアテマラは1996年に批准した。先住民の独自の文化、伝統、経済を尊重するもので、先住民としての自己認識が適用集団を決定する基本的基準とされる。政府は関係住民の参加を得て、これら住民の権利を保護し、当該住民の元の状態の尊重を保証するための責任をもつ。開発過程と関係住民の権利、就職と雇用条件、職業訓練、農業、工業、社会保障、衛生、教育、土地などの重要な規定が含まれる。本条の採択と前後して各国で植民地主義と同化政策は否定されるようになり、先住民のアイデンティティの尊重、文化と言語の復興の取り組みが広く行われるようになった。
- 7) 2018年の調査では、マヤ系 22 言語グループで分類される。(国立統計院ホームページ)
- 8) 語源はラテン人 (latino) に由来し、元来白人征服者を意味したが、現在グアテマラでは一般的に非先住民を意味して使用される。民族的出自が先住民であっても、支配側と見なされればラディーノと呼ばれる。同国で一般的に用いられる「先住民 indígena」とラディーノは、エスニックな対立項という感覚で使用され、実際の定義づけの曖昧な様相との対照性による規定が反映されている (小泉 1994, pp. 63-66)。
- 9) 原文では “pertenencia étnica”.
- 10) 原文では “idioma en que aprendió a hablar”.
- 11) 原文では “otro idioma que habla”
- 12) ロメロ 2018, pp. 306-308.
- 13) 富田 2017, p. 21.
- 14) 富田 2014, p. 238.
- 15) 国立統計院による 2011 年の推計値として、シンカとガリフナを合計すると、総人口の 24 パーセントを占めるというデータもある。(外務省グアテマラ共和国基礎データ : <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/guatemala/data.html#section1>, 2018年6月14日検索)
- 16) 近隣言語の中ではエル・サルバドル東部に現在も話者が存在するレンカ (lenca) 語と最も類似が見られるという (Campbell, 1997, p. 166)。また、筆者が 1960 年代に生きたシンカ語調査を行ったシューマン博士に直接聞いたところ

によれば、チブチャ語との類縁関係以外にも、近隣言語のマヤ・チョルティ(chorti)語や征服以前から植民地期にかけてこの地域でリング・フランカとして機能していたナワ系言語からの若干の貸借語が見られたという。生きたシンカ語の研究はほとんどなく、グアテマラ人言語学者で現在メキシコ自治大学人類学研究所のシューマン博士によって1967年に発表されたサンタ・ロサ県グアサカパン村における言語学・民俗学調査に基づく論文がほぼ唯一である。

- 17) Shumann, 1967, pp. 8-9.
- 18) Campbell, 1997, p. 166. その他, 「Endangered Languages Project 消滅の危機言語プロジェクト」によると, 話者数は0, 準話者数は2名とされる。
- 19) この数字の疑問をかかえ, 筆者が2006年8月と2007年8月にサンタ・ロサ県グアサカパンのシンカ団体を訪問したところ, シンカ語の言語運用能力のある話者は, グアサカパンの他にも, 同県サン・ファン・テアコ村に若干名存在し, いずれも80才を超える高齢者であるとのことであった。
- 20) 原文は “Dependencia Presidencial de Asistencia Legal y Resolución de Conflictos sobre la Tierra” (L. Zuleta, C. Nassar y F. Gamarro, 2003, p. 90.)
- 21) 敦賀 2008, p. 125.
- 22) 原文は “Centro de Documentación e Información Maya”
- 23) グアテマラでは1877年に永代借地制度廃止によって植民地時代からの先住民の共有地が取り上げられ大地主の手に渡るようになった。それ以降, 土地を失った多くの先住民は大農園の農業労働者となり搾取されることとなった。
- 24) Letonia, Zuleta, C. Nassar y F. Gamarro, op. cit., pp. 99-100.
- 25) Ibid. pp. 126-128.
- 26) Dary 2010, pp. 192-193.
- 27) Letonia, Zuleta, C. Nassar y F. Gamarro, op. cit. p. 85.
- 28) Ibid, p. 83.
- 29) 2012年4月に土地奪回を求めてマヤの人々とデモ行進を行い (Prensa Libre 紙 2012年4月10日), 同年8月にも教育省に対し, シンカの伝統的文化教育を認めるよう支援を求める (Prensa Libre 紙 2012年8月29日) など, シンカの活動は同国の主要紙で報道されている。
- 30) ここでは, 筆者が2006年8月と2007年8月にサンタ・ロサ県グアサカパン町で「グアテマラ・シンカ議会」のメンバーを訪問した際に得た情報から概要をまとめる。
- 31) <https://noalamina.org/latinoamerica/guatemala/item/39619-constitucional-de-guatemala-evaluara-existencia-de-etnia-xinca-opuesta-a-mina> (2018年5月7日検索)
- 32) <http://www.afpbb.com/articles/-/3126671> (2018年5月10日検索)

参考文献

- Campbell, Lyle 1997 *American Indian Languages-the historical linguistics of native America*, Oxford University Press, New York
- Censo 2002, 2002 Instituto Nacional de Estadística, Guatemala.
- Dary F., Claudia 2010 *Unidos por Nuestro Territorio-identidad y organización social en Santa María Xalapan*, Editorial Universitaria, Universidad de San Carlos de Guatemala, Guatemala.
- Letona, Zuleta, Camacho Nassar y Fernández Gamarro 2003 “Las tierras comunales xincas de Guatemala”, *Tierra, Identidad y Conflicto en Guatemala*, FLACSO, Guatemala.
- Perfil de los Pueblos: Maya, Garifuna y Xinca de Guatemala* 2001 Banco Mundial, Ruta, Ministerio de Cultura y Deporte, Guatemala.
- Richards, Michael 2003 *Atlas Lingüístico de Guatemala*, Secretaría de Paz, Universidad del Valle, Universidad Rafael Landívar, USAID, Guatemala.
- Roldan Salazar, Elmer José 2001 *Diagnóstico de la Comunidad Indígena Xinka “las Lomas”, chiquimulilla, Departamento de santa Rosa, con énfasis en el uso y manejo adecuado de los recursos naturales presentes en el area*, Universidad de San Carlos de Guatemala Facultad de Agronomía, Guatemala.
- Schuman Galvez, Otto 1967 *Xinca de Guazacapan*, Tesis que para obtener el título de Linguista y el grado académico de maestro en ciencias antropológicas, Escuela Nacional de Antropología e Historia, México.
- クリスタル, ディヴィッド 2004『消滅する言語 --- 人類の知的遺産をいかに守るか』(斎藤兆史, 三谷裕実訳) 中央公論新社.
- 小泉潤二 1994「境界を分析する --- グアテマラの場合」, 『民族の会おうかたち』黒田悦子 編著, 朝日新聞社.
- 狐崎智己 2006「国内武力紛争」, 『グアテマラを知るための 65 章』桜井三枝子 編著, pp.135-139, 明石書店.
- 小林致広 2006「マヤ先住民族のアイデンティティの形成」, 『グアテマラを知るための 65 章』桜井三枝子 編著, 明石書店.
- 桜井三枝子 編著 2006『グアテマラを知るための 65 章』, 明石書店.
2018『グアテマラを知るための 67 章』, 明石書店.
- 桜井三枝子 2011「抵抗のもう一つの形を考える --- ローカル, ナショナル, トランスナショナル・レベルの視点から」, 『日常の実践におけるマヤ言説の再領土化』吉田栄人 編著, pp.1-51, 東北大学大学院国際文化研究科.

- 桜井三枝子・中原篤史 編著 2014『ホンジュラスを知るための60章』, 明石書店.
- 敦賀公子 2008「シンカについての覚書——和平合意後のグアテマラにおけるもうひとつの“nuestra indígena (われらが先住民)”」, 神戸市外国語大学研究科論集第11号, pp. 121-137, 神戸市外国語大学大学院外国語学研究科.
- 富田晃 2014「ガリフナの文化——世界無形文化遺産」, 『ホンジュラスを知るための60章』桜井三枝子・中原篤史 編著, 明石書店.
- 2017「ガリフナの歴史その2——セント・ビンセント島の英仏中立時代と第一次カリブ戦争(17世紀半ばから1773年まで)」, 『ラテンアメリカ・カリブ研究 第24号』, pp. 21-44, つくばラテンアメリカ・カリブ研究会.
- 二村久則・野田隆・牛田千鶴・志柿光浩 2006『ラテンアメリカ現代史Ⅲ メキシコ・中米・カリブ海地域』, 山川出版.
- 宮岡伯人・崎山理 編 2002『消滅の危機に瀕した世界の言語』, 明石書店.
- 八杉桂穂 2006「インディヘナの言語——マヤ諸語・シンカ語・ガリフナ語」, 『グアテマラを知るための65章』桜井三枝子 編著, 明石書店.
- ロメロ, セルヒオ 2018「現代の先住民言語状況」(敦賀公子 訳), 『グアテマラを知るための67章』桜井三枝子 編著, pp. 306-310.

危機言語プロジェクト

<http://www.endangeredlanguages.com/lang/6195> (2018年6月14日検索)

国際労働機関 (ILO)

http://www.ilo.org/tokyo/standards/list-of-conventions/WCMS_239010/lang-ja/index.htm (2018年5月31日検索)

No a la Mina (ラテンアメリカ鉱山反対協会)

<https://noalamina.org/latinoamerica/guatemala/item/39619-constitucional-de-guatemala-evaluara-existencia-de-etnia-xinca-opuesta-a-mina> (2018年5月7日検索)

<http://www.afpbb.com/articles/-/3126671> (2018年6月2日検索)

(つるが・きみこ 商学部特任准教授)